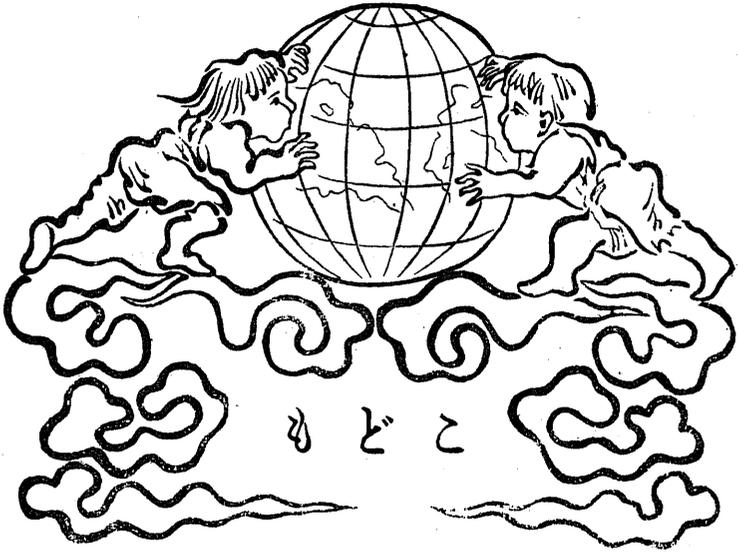


も ど 子 と 人 婦
號 八 第 卷 參 第



鼯鼠と兎との競走

やまとの翁

天氣のよいある夏の朝お
 日さんは、今やつと向ふの
 山の間のとこに、顔をだし
 かゝって居て、一面に露を
 あびた緑の木の葉の間から
 涼しいく朝の風が、すー
 っと吹いてきて、畑の稲の
 上を一息に通りますと、

ざーつと音がして、畑中緑の波をうち始める。

あんまり、心地のいゝ朝なので、平素は、お日さんの前ではろくに目の見ぬ鼯鼠までが、久しぶりで朝の運動をやつて見やうと思つて、のこくと一人で、でかけました。

さて、ぼつくと歩いて行くと、キャベツの畑があつて、その側に、こんもりとした、小さな、やぶがありました。その中に、一匹の兎が、うとくと朝寝をして居りました。

鼯鼠は、一體丁寧な動物ですから、兎の前を通りながら「兎さん お早う」といって お辭儀しました。其聲に兎は ひよいと目を醒ましたか、これは又 至つて高慢な性質ですから 折角、鼯鼠がお辭儀をしたのは、夫に挨拶もしないで置

いて、さも輕蔑した調子で、鼯鼠に話しかけました。

『やー鼯鼠君か、何だって、又、ろくく目も見えない癖に、

こんな疾うから出かけたのだ？

すると、鼯鼠の方は、音なしに

『なーに、ちよいと朝の散歩をしやうと思つて』

といひますと、兎は又、

『散歩だって！生意氣じゃないか、そんな短い足をして、なに

か他に足の使ひ道がありそーなもんだに』

こーいはれましたので、さすがの鼯鼠も、ぐつと癢にさわりました、

一體鼯鼠は、うまれつき、人から比べると、大變に脚が

短いので、夫も決して自分の故でないもんですから、いつでも

脚の事でからかはれるのが、一番痛癢なのです。夫でも、じつ

と 我慢をして、兎に申しますには

「だって、兎さん そんなに自慢するもんじゃありませんよ、
夫じや、君の足で、何が出来るとは？

「そんな事は、君の知った事じゃない
と兎は答へました。そこで、鼯鼠は、

『それでは、一番君と競走をして見ませう、そんなに輕蔑した
って、僕は決して負けない積りです
すると兎は、腹を抱へて笑ひ出しました。

「ハッハッハッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、
、そんな短い足をして、ハッハッハッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、
可笑しくって

堪らないじゃないか……けども やらうといふなら、僕だって

反対はしないさ。但し 賞品は何にする？

『さよーさ、金のメタルに、キヤベツ一籠としませう』

と鼯鼠が答へました、すると兎は

『よし、じゃあ、すぐ始めよう！』

『ちよつと待って下さい、僕は今から家へ歸つて支度をしてくるから、なめに、半時間もかゝらずに、歸つてきますよ』

といつて、鼯鼠は、急いで家へ歸つて行く、兎は一人で面白がつて待って居ります。

鼯鼠は、道々考へもつて行きました。『あの兎といふ奴は、全體高慢で仕様がな、併し、其割合に智慧がないのだ、夫で競

をしたら、あの長い足で、すぐ己を追ひ越すと思てるに違ないが……待てよ、何でも、計略で一番勝てやらなければならぬ。

夫から、家へ歸つて見ると、鼯鼠の女房さんが、一人で勝手の事をやって居ったから、いきなり

『さー、今からすぐ己と同じ風をして一所に畑へ行くのだ、さー急いだく』

と、丸で氣狂の様になって、噪ぎ立てるので、お女房さんは吃驚して

『なんですかねー、あなた、そんなに噪いでさ、一体どーしたのです

『なにに、今ね、畑で兎と競争の約束してきたのだから、お前も行って、一つ審判官になって貰はねばならぬのだ』
お女房さんは、之を聞いて目を圓くして

『まー、あなた、馬鹿なことにも程がありますよ、兎さんと競争なんて、どうしたって、叶ふもんですか、眞實に、あなた、餘ほど、どうかして居るよ』

すると、鼯鼠君は澄まし込んで

『黙って居らっしゃい、細工は、りうく仕上げをぞらうじたお前たちにや分らないさ、黙って早く仕度をしなさい』
仕方がないから、お女房さんも、早速、仕度をして、且那に付いて行きますと、途中で、鼯鼠君が、そつとお女房さんに、計

略を授けました。其計略といふのは、

先づ鼯鼠の夫婦は、どつちもよく似て居て、一寸見分けが附かない上に、二人とも同じ風をして居るのだから、尙更、どつちがどちらだか分りません。そこで、競走場へ行つてから、夫婦が決勝點の場所と、出發點の場所と、兩方に別れて居て、先づ、一二三の合圖で、兎と鼯鼠君と一所に驅げ出すと、兎が一飛びに決勝點へかけ付ける、すると、そこに、前程から待つて居たお女房さんが出て来て、もうさつきから来て待つて居るといって驚かしてやらうといふのであります。

さて、計略も出來たので、二人で、其手筈をして、競走場へ行くと兎は、先刻からチャーンと待ち構へて居ますから、鼯鼠と

子
兔とは、一所に并んで用意をします。

「鼯鼠君　いゝかね？」

「大丈夫！」

「ちやー　一……二……三

ど
といふや否や、兔は丸で風の様な早さで、野原を走って行きま
す、鼯鼠は、落ち付き拂って　やつと　二歩か、三歩か行つた
と思ふと、すぐ自分の場所に戻つて来て　休んで居りました。
兔は、そーとは知りませんから、一生懸命にかけ出して、すぐ
決勝点と定めた松の木へ走りつきました。所が驚いた、いつの
まにか、ちやんと、鼯鼠がついて居て

「僕は　もーさっ　きから来て居ますよ」



といて居る。これは、鼯鼠の計略なんで、實は、鼯鼠のおかみさんなのですが、兎は夫と知らないもんですから、すっかり、たまげて仕舞て、

「オヤ、こりやいけないぞ」

と思ひましたが、今度こそはと思つて

「じゃー鼯鼠君、も一度、よしか 一二三」

といつて、その松の木から、もとの所へ向けてかけ出しました。お女房さんは、又後へ戻つて、松の木に隠れました。

一生懸命に駆けつけてきて、元の所へ来て見ると、又驚いた何時の間にか、ちやーんと、鼯鼠君が待つて居て

「僕は、もーさつきつきましたよ」

といつて澄して居る、

「オヤ 又か」

と思つたが 今度は もー兎もヤケ氣味になつて

「鼯鼠君、夫じやもー一度やるか」

と言ひ出しました

「何度でも僕の方は構はないから」

と言つて 鼯鼠君は、どこまでも丁寧です

それから、兎は 驅けつたり 戻つたりして、都合、みんな

七十三回ほど走りました。けれども、其たんびに、いつも鼯鼠

が勝利を得ました、

とーぐ 七十四回目になつて、兎は もー全く疲れて仕舞たと

見えて、途中で倒れたなり、暫くは起き上ることも出来なくなりました。

そこで、鼯鼠は甘く計略が當つて高慢な兎を負かしたから約束の金のメタルと、キヤベツ一籠とを取つて、夫婦連れで、ゆるく家へ戻りましたとさ

めでたしく

